

EUIJ 国際シンポジウム「EU 拡大とヨーロッパ・アイデンティティ」

(2006年9月16日・17日、東京外国語大学)

篠原 琢

EUIJ として第三回目になる国際シンポジウム、「EU 拡大とヨーロッパ・アイデンティティ」は、2005年12月に北海道大学で行われた第二回 EUIJ 国際シンポジウム、「中東欧における地域：過去と現在」(EUIJ ニュースレター Issue 6)の続編ともいえるべきものである。2005年の会議が EU に統合されつつある中東欧を題材とし、その地域・空間意識を歴史的・政治的に問うたのに対して、今回のシンポジウムは全体として、EU 拡大に伴って変容しつつある政治共同体の意識と規範とを問題とするものであった。初日の第一セッションは EU と加盟諸国の市民権の問題を(「ヨーロッパ市民権再考」)、二日目の第二セッションは民主主義のあり方について(「民主主義の諸相」)、そして第三セッションは、政治共同体のアイデンティティを反映する歴史意識(「歴史学と歴史意識の変容」)を扱った。ヨーロッパ拡大に伴う諸問題は、そのフロンティアにおいてもっとも先鋭的、かつ集約的に観察される、という前提は、先回の会議と共通しており、今回も、EU 新規加盟国であるチェコ、ポーランド、EU に隣接するウクライナからそれぞれ一人ずつ、そして加盟をめぐって激しい論争が絶えないトルコから二人の報告者が招待された。

ヨーロッパ市民権

ヨーロッパ統合は、啓蒙のヨーロッパが生み出した普遍的な市民社会の理念を標榜しているが、市民権は、政治共同体の境界をもっとも端的に示すものである。「ヨーロッパ市民権」を、EU に加盟する諸国民国家の市民権との間で調和させることはいまだに困難な課題である。加盟諸国が抱える EU 域外からの移民の市民権、政治参加の問題も、ことをさらに複雑にしている。EU は内に向かって、加盟諸国の国民国家的原理をどこまで克服するのか、という問題は、EU が外に向かって「拡大した国民国家」(「ヨーロッパという要塞」)として閉鎖的になろうとするのか、という未来像と密接にかかわりあっている。その意味で、アイハン・カヤ氏(イスタンブール・ビルギ大学)の報告はもっとも興味深かった。カヤ氏によれば、ヨーロッパ連合への加盟が政治日程に上りつつあるトルコでは、ムスタファ・ケマル以来のトルコ共和国像に修正が加えられ、少数民族の存在は、トルコの多文化的政治社会を保障するものとして肯定的に評価されるようになったという。そこではたとえば、オスマン帝国末期のアルメニア人虐殺のような、従来タブーとされてきた歴史にも深刻な反省が加えられている。しかし、EU 加盟によってトルコ社会が変わることにしてもまして重要なのは、トルコの EU 加盟によってヨーロッパ概念が変容することにある。つまり文明論的・本質主義的な理解ではなく、内と外に向かって浸透膜のように開かれた新たな政治共同体としてのヨーロッパである。宮島喬氏(立教大学)が指摘するように、ヨーロッパの実験は、たとえば東北アジア共通の家といった構想にも重要な示唆を与える

ものだろう。

新しい歴史理解を求めて

第三セッションは、チェコ、ポーランド、ウクライナといったポスト共産主義（ポスト・ソヴィエト）期にある社会の歴史意識を扱った。そのどこでも新たな史料の公開、研究・出版をめぐる新しい条件の下で、新しい題材が発見され、方法論的な革新も進んでいる。カヤ氏が示したトルコと同様、ここでも多元的な歴史理解が共通理解になっているように思われる。しかし、ミハル・コペチェク氏（チェコ科学アカデミー現代史研究所）が示したように、依然として歴史をめぐる議論は、強く政治化されている。とりわけ、ネオ・リベラルで、かつナショナリスティックな潮流が支配的な言説になり、一種の修正主義を体現しようとしている。フロアから発言があったように、新しい政治的配置における歴史の再審が、暴力の記憶の抹消、新たな忘却を強いてはいないか、常に論じていく必要がある。セッションには、中東欧の専門家が集められたが、歴史をめぐる政治学については、東西ヨーロッパを越える同時代性や、日本での「歴史認識論争」の位置をも同時に問題化するような射程が必要であろう。会議後のワークショップや対話を通じて、そのことも十分に確認されたように思う。

会議には連日、200名以上の聴衆が参加し、報告に熱心に耳を傾けた。聴衆には、専門家ばかりでなく、学生や、一般市民の姿も数多く見られた。会場が大きかったせいで、報告者と聴衆のあいだに親密な討論ができなかったのは残念だったが、その後のパーティーや小規模なワークショップで、活発な対話が行われた。